

2019年11月7日

東京都都市整備局市街地建築部長 殿

東京都鉄筋継手検査機関連絡協議会  
会長 安藤 純二

### 圧接継手外観検査の実施案について

公益社団法人日本鉄筋継手協会の鉄筋継手統計調査報告書によると2017年度の建築工事における圧接継手の全国施工箇所数は約26,815,748箇所であった。

関東圏における施工箇所数は約12,931,306箇所、全国総数の48%を占める。

東京都における施工箇所数の記録は無いが、8割程度と仮定すると約10,345,045箇所となる。(2017年度)

	施工数	備考
全国	26,815,748 箇所	
関東	12,931,306 箇所	全国の48%
東京	10,345,045 箇所	関東80%仮定

上記の東京都施工数から必要な検査員数を算出すると

1日の圧接数（施工数÷稼働日（240日））＝43,104箇所

1日のロット数（1ロット平均100箇所程度）＝431ロット

1日の必要検査員数（3ロット/日）＝144人

**圧接継手の外観検査を全数検査機関が行う場合、検査員は144人必要となる。**

東検協の昨年度検査結果集計表から予想される20社の圧接検査数は1,500,000箇所程度である。

検査数から1日の平均検査員数を算出すると、**19人**の稼働となる。

東検協会員の総検査員数は約334人（別紙）であり、昨年度の稼働人員は約**5.6%**程度であるが、全数検査必要人数144人に対しては**43%**を占める。

現状の1割未満の稼働人員はあまりにも低すぎる数値であり、各社1割～2割は即座に対応可能な人数と考えられるが、4割以上のシフトについては3年以上の準備期間が必要と思われる。

圧接継手の検査機関による受入検査の実施については、建物の規模毎に段階的に実施の義務付けを行うのが現実的あり、たとえば初年度は10,000㎡以上の建物、3年後からは5,000㎡以上建物、さらに3年後から全ての建物というようにすれば対応可能であると考えます。